

チャイタンニャデーヴァが南インドに巡礼に出かけました。ある日、彼は一人の男がギターを朗読しているのを見ました。もう一人の男が離れたところにすわり、それをききながら泣いていました。滝のように涙を流していました。チャイタンニャデーヴァが、『あなたにこの意味が全部分るのか』とたずねると、男は『いえ、お坊さま、私には聖典の言葉は一つも分りません』と言いました。『ではなぜ泣いているのか』とチャイタンニャがたずねると、その信者は言いました、『私は目の前にアルジュナ^{*}の馬車を見ます。主クリシュナとアルジュナとがその前のほうにすわって話しているのを見ます。私はこれを見て泣くのです』と。

なぜヴィツギヤニは神に向かって愛の態度をとるのか。答えは『私意識』がしつこくつづくから、というものです。それはたしかに、サマーティの状態の中では消えます。しかしそれは戻ってきます。普通の人間の場合には、『私』は決して消えるものではありません。アシユワッタ^{*}の木は、切り倒してもつぎの日には芽が出て来るでしょう(みな笑う)。

知識を得たあとでさえも、この『私意識』はどこともしれないところから出て来るのです。トラの夢を見る。それから目が覚める。しかし胸はまだドキドキとしているでしょう。われわれのすべての苦しみは、この『私』からきています。雌牛は『ハンバ』と鳴く。それは『私』という意味だ。それだから雌牛はあんなに苦しむのです。それはくび輪につながれて、降っても照つても働かされる。それから、おそらく肉屋に殺されるだろう。その皮からは靴がつく

に持って行くことはできない。われわれは、ちよと仕事のために田舎からカルカッタにきている人びとのように、ある務めを果たすためにこの世に生まれて来るのです。金持ちの人の庭園にもし訪問者があれば、管理人はその人に向かって『これが私たちの庭です』とか、『これが私たちの池です』とか言うでしょう。しかし、もしこの管理人が何か間違ったことをして解雇されたなら、彼はマンゴーの木の一箱一つ運び出すことはできません。門番に頼んでこつそりと送り出すのです(笑う)。

神は、二つの場合にお笑いになる。彼は、医者が病人の母親に向かって『心配りませぬ、お母さん。私が必ずこの子を治してあげます』と言うとき、お笑いになる。彼は『私がこの子の生命をとりあげようとしているのに、この男はそれを救ってやるなどと言っている』と思って、お笑いになるのです。神はまた、二人の兄弟がひもを張って『こちら側が私の土地でそちら側がお前の土地だ』などと言い合っているときにお笑いになる。彼は『全宇宙は私のものである。それなのに彼らは、自分がこの部分を持つとかあの部分を持つとか言っている』と思ってお笑いになるのです。

人が推理によって神を悟ることなどができますか。彼の召使におなりなさい。自分を神に任せきり、それから彼に祈るのです。(微笑して、ヴィディヤール・シャールゴルに) さて、あなたはどういう態度をとっておられるのですか

ヴィディヤール・シャールゴル(微笑しつつ)「いつか、あなたに打ち明けましょう」(みな笑う)

られ、また天敵もつくられて情け容赦もなく打たれる。ついに、その腸から綿をすくのに使われる弓のためのひもがつくられる。そうするともう、それは『ハンバ! ハンバ!』とは言わないで、『トゥワフ! トゥワフ!』、『あなた! あなた!』と言う。そのときにはじめて、雌牛の苦しみは終るのです。おお主よ、私は召使です。あなたはご主人です。私は子供です。あなたは母でいらつしゃいます。

あるときラーマがハヌマーンに、『お前は私をどう見るか』とたずねられました。するとハヌマーンは、『おおラーマ、『私』の感じを持っているあいたは、私はあなたが全体で私は一部である、あなたはご主人であり私は召使である、と見ます。しかし、おおラーマ、真理の知識を持っているときには、あなたは私であり、私はあなたであることを悟ります』と答えました。

主人と召使の関係がふさわしいものです。この『私』はどうせ消すわけにはいかないのだから、こやつを神の召使にしておしまいなさい。

『私が』と『私の』——これらが無知をつくっているのです。『私の家』『私の富』『私の学問』『私の所有物』——人にこのようなことを言わせる態度は、無知からきます。反対に、知識から生まれる態度は、『おお神よ、あなたがご主人であり、これらすべてのものはあなたのものです。家も、家族も、子供たちも、召使も、友だちもあなたのものです』というものです。

人は絶えず死をおぼえていなければいけません。何一つ死ぬとき

師(笑いながら)「神は、たんなる学問推理によって悟ることはできません」

神の愛に酔って、師はおうたいになった。

母カーリーがなんであられるか、誰が理解できるだろう。

六派の哲学さえ、彼女を示す力は持たない。

聖典は言う、自己の中にすべての喜びを見いだすヨーギーの、内なる自己であるのが彼女だ、そのやさしい意志により、すべての生きものの内に宿るのが彼女である、と。

大宇宙も小宇宙も、母の胎内に宿る。

さてそれがどんなに広大であるか、分るか。

ムーラーダララの中で、またサハスラーラ^{*}の中で、

ヨーギーは彼女を瞑想する。

シヴァ以外の誰が、彼女のありのままの姿を見たか。

広大な蓮華のなか、彼女は配偶者である

白鳥(シヴァ、絶対者)のかたわらで遊ぶ。

人が彼女を悟らうと願うとき、ラーマ・プラサドは

笑わずにはられない。

彼は言う、彼女を知らうと思ふことはちよと、

果てのない海を泳ぎ渡ることができると思ふのと

同じようにおかしい、と。

しかしああ！ 頭は理解してもハートはまだ理解しない。
小人であるのに、それはなお、月をとりこに
しようとする。

つづけて、師はおっしゃった、「ききましたか。

大宇宙も小宇宙も、母の胎内に宿る。

さてそれがどんなに広大であるか、分るか。

また詩人はこうも言っています。――

六派の哲学さえ、彼女を示す力は持たない。

たんなる学識では、彼女を悟ることはできないのです。

人は信仰と愛を持たなければいけない。信仰はどんなに力の強いものであるか、一つ話しましょう。ある男が、セイロンからインドに向かって海を渡ろうとしました。ビビシヤナが彼に、『これを自分の衣服のはしにくくりつけて行け。そうすればお前は無事に海を渡るだろう。水面を歩いていくことができるだろう。しかし決して中身を調べてはいけません。それをすると沈むだろう』と言いました。男はやすやすと海面を歩いて行きました――信仰の力とはこのようなものなのです――そのとき、途の半ばを行つたところで、彼は思いました、『私が水の上を歩くことができるのは、ビビシヤ

おおわが心よ、お前はどのようにして、

神の性質を知ろうと努めているのか。

お前は、暗い部屋に閉じ込められた狂人のように
手さぐりしている。

彼は愛の法悦によって悟られるのだ。それなしに

どうして彼の深さをはかることなどができるだろう。

否定ではなく、肯定によってのみ、

彼を知ることができる。

ヴェーダによってでもタントラによってでも、

六派の哲学によってでもない。

彼がお喜びになるのは、愛の万能薬の

中においてだけだ、おお心よ。

彼は肉体の奥の奥底、永遠の歓喜の中に

宿つておいでになる。

そしてその愛のために、偉大なヨーギーたちは

時代を超えて、ヨーガ*を行っている。

愛が目覚めると主は磁石のように、

その魂を彼のそばにお引き寄せになる。

私が母と呼んで近づくのは彼である、と

ライム・プラサードは言う。

だが私はここ市場の中で、この秘密を

ぶちまけなければならないか。

私が与えたヒントによって、おお心よ、

ナがくれたこの不思議なものはいったいなんだろう』と。彼は結び目を解き、ラーマという名を書きつけた一枚の葉だけを見つめました。『なんだ。こんなものか！』と彼は思い、そしてたまたま沈んでしまいました。

ハヌマーンはラーマの御名への彼の信仰によって海を飛び越えたが、ラーマ自身は橋をかけなければならなかった、という話があります。

人がもし神への信仰を持っているなら、たとえ罪を犯したとしても――いや、極悪の罪を犯したとしても――恐れる必要はありません――

それからシュリー・ラーマクリシュナは、信仰の力をたたえる歌をおうたいになった。

もし私が、ドゥルガーの御名をとさえつつ死ぬこと

さえできるなら、

どうしてあなたが、おお聖きお方よ、

私に救いを拒むことがおできになりましょう、

たとえ私が、みじめな奴でありましようとも……

師はつづけられた、『信仰と帰依です。人は信仰と帰依によってらくに神を悟ります。彼は、愛の法悦によって悟られるのです』

こういつて師はふたたびおうたいになった。

その存在がなんであるか、察するがよい！

うたいながら、師はサマーデイにお入りになった。彼は西を向き、手を合わせ、上体をまっすぐに、不動の姿で長椅子にすわつておられた。一同は期待をこめて彼を見まもつた。ワイディヤー・シャールも言葉を忘れ、師から目を離すことができなかつた。

しばらくして、シュリー・ラーマクリシュナは普通の状態に戻る兆候を見せられた。彼は深く息を吸い、微笑しておっしゃった、『神を悟る方法は、愛と帰依の法悦です――つまり人は神を、愛さなければならないのです。ブラフマンである彼が、母と呼ばれているのです。』

私が母と呼んで近づくのは彼である、と

ライム・プラサードは言う。

だが私はここ市場の中で、この秘密を

ぶちまけなければならないか。

私が与えたヒントによって、おお心よ、

その存在がなんであるか、察するがよい！

ライム・プラサードは心に向かって、神の性質を推察することだけを求めています。彼は心に、ヴェーダの中でブラフマンと呼ばれているものを自分は母と呼びかけているのだ、そのことを理解せよ、と求めています。属性を持たない彼が、同時に属性を持っているの

です。ブラフマンである彼が、同時にシャクティ^{*}なのです。無活動なものとして考えられたとき、彼はブラフマンと呼ばれ、創造者、維持者、および破壊者として考えられたとき、彼は本源エネルギー、つまりカーリーと呼ばれるのです。

ブラフマンとシャクティとは、火とその燃える力のように、同一の存在です。われわれが火について語るときには、自動的にその燃える力をも意味しています。また、火の燃える力は、同時に火そのものを意味しています。もしあなたがいっばうを認めるなら、必ず他のほうをも認めなければなりません。

ブラフマンのみが、母と呼ばけられるのです。これは、母というものが深い愛の対象であるからです。人はただ愛によって、神を悟ることができるのです。法悦、帰依、愛、および信仰——これらは手段です。一つの歌をきいてください。

瞑想に応じて、人の愛の感情は深い。

愛の深さに応じて、彼の得るところは決まる。

そして信仰はすべてのものの根。

もし母、カーリーの御足^{おし}のもとなる甘露の湖に、

私の心が浸ったままでいるなら、

礼拝や供物や犠牲供養はあつてもなくてもよい。

必要なのは神に専念すること——強烈に彼を愛することです。

『甘露の湖』は不死の湖です。人は、その中に沈んでも死なない

このような慈善活動をすることによって、あなたはじつは、自分のためになることをしているのです。もし、それらを無私の心で行うことができるなら、心が純粋になって、神への愛が深まるでしょう。その愛を持つやいなや、あなたは神を悟るのです。

人は、ほんとうは世を救うことはできない。神だけがそれをなさるのです——太陽と月をおつくりになつた彼、親たちのハートに彼らの子供たちへの愛を入れ、高貴な魂たちに慈悲心を、修行者や信仰者たちに神への愛をお授けになつた彼だけがそれをなさるのです。少しの利己的動機もなしに他者のために働く人は、じつは自分のためになることをしているのです。

あなたのハートの中には黄金が埋められています。しかしあなたはまだそれに気づいていません。それは薄い土の層でおおわれています。ひとたびあなたがそれに気づけば、これらすべてのあなたの仕事は少しずつ減っていくでしょう。子供が生まれたあとは、家の嫁はその子の世話にかかりきりです。彼女のすることは全部、子供のための仕事です。姑は彼女に、家の仕事はさせません。

前進なさい。あるとき一人の木こりが、木をとり森に入りました。一人の僧侶が彼に、『前進せよ』と言いました。彼は教えにしたがって、白壇の木を見つけました。数日後に彼は考えました、『僧侶は前進せよと言った。彼はここでとまれとは言わなかった』と。そこでさらに前に進み、銀鉱を発見しました。数日後にさらに進んで金鉱を、そしてつきにはダイヤモンドやその他の宝石の鉱脈を発見しました。このようにして彼は、巨万の富を得たということ

で不死になります。ある人びとは、神のことを考えすぎると気が狂うなどと言うが、それはほんとうではありません。神は甘露の湖、不死の海です。彼はヴェーダの中で、『不死なる者』と呼ばれています。その中に沈んで死ぬことはありません。まさに死を超越するのです。

礼拝や供物や犠牲供養はあつてもなくてもよい。

もし人が神を愛するようになれば、これらの勤行^{ごんぎょう}にあまりあくせくする必要はありません。風のないあいだけ、扇は必要なのです。南風が吹きはじめれば扇は片づけられます。そのときにはなんで扇の必要がありません。

(ヴィディヤール・シャールゴルに) あなたが行っている活動は良い。もしそれらを無私の精神で、うぬぼれを棄て、自分が行為者であるという思いを棄てて行いことができるなら、非常によろしい。そのような行為によって人は神への愛と信仰を育て、ついには彼を悟るのです。

より深く神を愛するようになればなるほど、活動をしたという気持ちは弱くなるでしょう。嫁が身ごもると、姑は彼女に与える仕事を減らします。月が重なるにつれていつそ彼女に与えられる仕事は少なくなります。出産のときが近づくと、それが胎児に障ったり難産の原因になつたりしないよう、彼女は仕事をするをまったく許されません。

です。

無私の働きによって、神への愛が心に育ちます。それから、彼の恩寵によって、人はやがて彼を悟るのです。神は、見ることができます。人は、私があなたに話しているように、彼に話をするのできるのですよ]

無言の驚きのうちに、一同はすわつて師の言葉にきき入つていた。彼らには、知恵の女神みずからがシニリー・ラーマクリシュナの上につわつて、ヴィディヤール・シャールゴルだけでなく全人類に向かつて、その福祉のためにこれらの話をしていらっしゃるように思われた。

夜の九時に近かった。師は帰ろうとなさつた。

師(微笑して、ヴィディヤール・シャールゴルに)「私が話した言葉はほんとうは余計なものです。あなたはこういうことは全部知っておられる。ただそれを意識しておられないだけだ。ヴァルターナの金庫の中には数えきれないほどの宝石があります。しかし彼自身はそれを知らないのです」

ヴィディヤール・シャールゴル(微笑して)「お好きなようにおっしゃるがよろしい」

師(微笑して)「おお、そうですよ。自分の召使の名前を全部は知らない金持ち、また自分の家にある数々の貴重品さえも知らない金持ちがたくさんいます」(みな笑う)

誰も彼もが、師の話をきいて喜んだ。ふたたびヴィディヤール・シャールゴルに向かつて、彼は微笑みつつおっしゃつた、「どうぞいつ